

国内肥料資源の活用フォーラム

20日、熊本・益城町

「国内肥料資源の利用拡大に向けたマッチングフォーラム九州」が20日正午から、熊本県益城町のグランメッセ熊本で開催される。原料を輸入に頼り、価格が高止まりする肥料について、国内資源の活用に向けた交換を進めようと、講演や先進事例発表のほか、肥料関連の企業などがブースを出展する。

持続可能な農業を進めるため、堆肥や下水など肥料成分を含む国内原料の供給者、肥料メーカー、利用者らの連携の契機となる機会として、リベラルタス・コンサルティング



公式サイト
はじまり

(本社・東京都)が開く。基調講演は、堆肥と化学肥料などを混ぜた「混合堆肥複合肥料」を例にした国内資源の有効活用がテーマ。先進事例の発表では、下水汚泥について佐賀市上下水道局が説明するほか、畜産関係はJA菊池(熊本

県)、バイオマスでは南国興産(宮崎県)、肥料製造ではJA鹿児島県経済連が登壇する。会場には肥料製造や農機に関する約50の事業者や団体に、自治体がブースを出展するほか、業界団体による相談窓口も設ける。来場希

季節風

「もう売り物にならないから」。7月の大雨被害で取材を受けたくれた農家が、ハウスミカンを持たせてくれた。甘みと酸味のバランスに気を配って生産され、日本一の生産量を誇る唐津のミカンは、変わらぬおいしさだった。「売り物にならない」は、もらうのを遠慮しないよう気遣ってくれた言葉だったのだ

就農継続の力に

7月4日にJAから7つの品評会を取材し、最優秀賞が7日の東京・大田市場での競りで過去最高の150万円の値をつけた。大雨に襲われたのは、それからわずか数日後のこと。被害の大きさに胸が締め付けられる思いがした。今回の大雨で農業関係者が心配していたのは、被災が離農につながってしまうこと。JAからの職員の片付けや復旧作業

の手伝いに農家に出向いていたが、それは気落ちした生産者がもう一度前を向く思いも支えたのだと思う。

(古賀真理子)